

親友の弁当

校長 佐藤 宏美

小学生・中学生の時の思い出は楽しい思い出と反対に楽しくない思い出（つらい、悲しい、にくたらしい、耐えられないなど）があると思います。もちろん、全部が楽しい思い出ばかりの人はいないでしょうし、思い出したくない思い出ばかりの人もないでしょう。

学級や学校はいわば「小さな社会」を形成しています。その中で社会性を身に付けます。学級の一員として、責任や協力等も求められます。保護者のみなさんもお存知の通り、6年生になると優しさや指導力も求められることが多くなります。

また、子どもたちはそれぞれ運動能力、学習力、言語力、体力、押しの強さ、努力の力、けんかの力、家庭などが違います。その結果として、小学生ながら上下関係ができ、にがい思い出になるようなことが必ずといっていいほどおきます。

この「小さな社会」の中で、自分の生き方、友だちへの接し方を身に付けていくのがとてもとても大切な学習だと思っています。

私が小学校1年生の時のことです。学校の給食は、まだ牛乳だけで毎日お弁当を持って学校に行っていました。給食時刻になると、子どもたちは家庭から持ってきた弁当を開けて、仲のよい友だちと一緒に食べるのが普通でした。入学して二ヶ月くらいたったころ、いつも弁当をかくして一人で食べているA君に気付きました。学級内でも、いつも静かでまじめに何でもやっているA君でしたので、不思議に思いながら見ていました。

そんなある日もA君が一人だけで弁当を食べようとしていたので、一緒に食べようと自分の弁当を持って向いにすわりました。A君はにこにこして受け入れてくれました。受け入れてもらえないのではと思っていた私は、1年生ながらもほっとしたことを覚えています。

A君が大きな弁当を開けると一尾だけ焼いたイワシが白いご飯の上のにめり込むように入っていました。その時にはびっくりしてA君の弁当を見ることはできませんでした。ほとんどの子が玉子焼き、梅干し、ソーセージの時代だったのです。その次の日もその次の日も同じ弁当でした。梅干しだけの弁当、ごはんだけの弁当の日もありました。

A君の弁当のことを母親にも友だちにも先生にも6年間言えませんでした。自分でも言えなかったわけはわかりません。幸い、2年生の春からは牛乳とパンの給食なり、二人だけがかくれて食べる弁当給食は終わりました。

A君は中学校を卒業するまで最高の親友でした。